

・グッドラックとやま 2025 街づくりキャンペーン・

# まちなかの清流・松川を活かし、 “水の都とやま”創出を!

昨年1月の能登半島地震で被災した松川の復旧工事が、今年も夏から再開された。「水の都とやま」のシンボルゾーンを市内中心部に!と、昭和62(1987)年、国・県・市・経済界の支援で運航を開始した松川遊覧船も、残念ながら現在は来春まで運休を余儀なくされている。

今回は松川遊覧船の原点に帰り、運航開始当時に各界の皆様からいただいた様々なご意見を振り返りながら、富山の“水”のシンボル空間・松川を活かした街づくりについて改めて考える機会としたい。

※平成元(1989)年10月号掲載特集を再編集





中沖豊さん  
(富山県知事)

自然ということでは、やはり日本は“水”の国、富山県は水の県ですからね。アジア・アフリカで水不足、ヨーロッパは硬水で質が悪いとなると、良質で豊富な“水”を持つ日本、とりわけその中でも“水”に恵まれた富山県は、世界に誇りうるわけです。また、日本がここまで発展したのは教育の功績であり、学校教育に限らず、社会教育を含めた国民全体の教育水準の高さは、日本が世界に誇る最大のものと思います。

富山県は公民館設置率や生涯教

育内容の充実などに見られるように、教育熱心で学習意欲の非常に

※役職はすべて1989年の掲載当時のままです。



▲川べりの遊歩道に“水”を感じる様々な仕掛けが工夫されている、アメリカ・サンアントニオのリバーウォーク。




新田嗣治朗 さん  
(日本海ガス(株)取締役社長)

高い県です。このように日本の特色と思われるものが、すべて富山県にあるわけですね。そういう意味で富山県は全国の実験劇場ともし、言わば「日本の実験劇場」とも考えられます。ですから、豊かな自然、高い教育水準、勤勉な県民性などを柱とした、これからの日本の進路を占う壮大な実験劇場とというのが富山のイメージではないかと思えますね。

富山県は非常に面白く、ユニークな特色を持つ県ですから、打ち出し方によってはとても個性的で、魅力的な郷土づくりが可能になるんです。

富山はこれだけ地下水の豊富な土地柄なので、もう少し噴水を作っていたら、と、「水の都」の雰囲気が出るのではと思います。

ヨーロッパの街はいたる所に噴水があり、彫刻があり、芝生も非常にきれいに手入れされています。水は大変楽しいものですから、県庁前にある噴水だけでなく、小さなものでいいので、あちこちにあるといいですね。非常に水が豊富な県であることを活かし、水を最大限利用して楽しい街づくりの演出を考えてほしいですね。



本木隆久さん  
(本木佛具店 専務)

京都の街がいいのは、水と石の取り入れ方がうまいからだと思うんです。富山もちよつと掘れば水が出るのに、昭和40年代まで水に悩まされてきた克水の時代があり



木本隆久さん  
(木本佛具店専務)

京都の街がいいのは、水と石の取り入れ方がうまいからだと思うんです。富山もちよつと掘れば水が出るのに、昭和40年代まで水に悩まされてきた克水の時代があり

富山の「水」を印象付ける  
松川遊覧船の運航



緒方裕さん  
(富山地方鉄道)取締役社長

富山県は「水」が豊富で美しく美味いという「水の都」を象徴するものが必要で、松川観光遊覧船のオープンには意義なものと言えます。今後、これを足がかりに関係者が協力して、神通川だった松川やいたち川、富岩運河を経て岩瀬に至る水辺利用に真剣に取り組みたいものです。これは一朝一夕にできるものではなく、万里の長城

今、ウオーターフロント(水辺)開発計画が全国的に注目され、胎動しています。海外には美しい海岸都市が多く、欧州の内陸でもウイン河やドナウ河流域の都市は、河と都市が一带の景観を作っていると言えるでしょう。一方、富山市と神通川・常願寺川との関係はこれには遠く及びません。

県庁所在地の富山市は、富山県の観光の基地としての機能と風格を持つべく、これから格段の努力を要するでしょう。そんな中で、市内中心部に松川遊覧船がオープンした功績は大きく、富山市が快適生活の可能な街として今後評価される上でも、街に表情を与える貴重な一石を投じたことは間違いない事実であろうと思います。





北堀 健さん  
(富山市公園緑地課課長)

松川は県内でも桜の名所として有名です。近年、水質の浄化が進み、錦鯉が放流され、芸術の香り高い彫刻が設置されました。水と緑・文化の調和した好例として全国に注目されており、他市からもよく視察に来られます。

揺れる水面を眺めながらの桜並木の散策、清流に群れ泳ぐ錦鯉、ゆく秋を惜しみ照り輝く紅葉、新雪に衣替えする冬景色等、松川には四季それぞれの趣があり、まちなかのオアシスとして限らない美しさと安らぎを覚え、愛着を感じますね。



金尾力松さん  
(富山港湾運送(株)取締役社長)

今回、松川遊覧船乗船の機会に



▶松川遊覧船がオープンして以来、松川はまちなかで水辺を楽しみながらお花見ができるユニークな空間として知名度を高めてきた。

恵まれ、富山を違った角度から観察することができ、大変参考になった。昼下がりの蝉しぐれを、街なかで聞いた驚き。低く垂れ下がった桜の青葉が水面に揺れ、過ぎゆく静けさにしばし時を忘れた。松川遊覧船で大通りのトンネルを通過するたびに広がる視野の変化が楽しい。文明社会の雑踏、路面電車の音、絶え間ない警笛が遠い昔のことにように消え行く。

近代化が進むに従い、地方の開放が進むほどに西欧の技術に支えられた現代文明の峽間に知性の深刻な危機を覚え、言いようのない

不安と閉鎖性を感じる。

実用性と合理性だけが追求される中、文化の向上を目指し、環境整備を進める度に意味もなく擬似都会な街に作り変えられてゆく様を見守っていると、現代に失われたものが語りかけてくるように感じる。

松川遊覧船で自然に親しみ、共にあることの一体感、ここに生きていることの充足感に浸り、水に遊ぶ鯉、飛び跳ねる鮎の群れを眺め、水面を分けて静かに行き交いながら、改めて故郷を再発見し、心の安らぎを取り戻した。

## “水”を活かした街づくりを、発展の原動力に



村松久男さん  
(株)村松屋

すべての人が自分たちの街をど

んな街にしていきたいかという考えを持って、その実現のために多少自分の利益を損なったとしても、協力を惜しまないという意識が、



亀田 進さん  
(株)ラウンド代表取締役

富山には立山連峰や黒部峡谷だけではなく、いい所がたくさんあります。それを知ってもらうには、

街を発展させていく原動力になっていくと思います。公と私の、ほよいバランスが大切ではないでしょうか。

また、富山に限ることではありませんが、一般の人の間に公共性や協調性が欠けているように感じます。東京では、たとえ自分の店にリスクがあることでも、それによってその地域により多くのメリットがあれば、結果的には自分の店も良くなるというふうに考えることが多いですね。そのような意識改革も必要であり、そのような公共性が浸透していないと、都市開発は行い難いと思います。



まず来てもらわなければなりません、松川遊覧船がその足がかりになるといいですね。

富山では今まで観光でいい目に合った人がいないのが、ソフト面が充実しない原因ではないでしょ

## 自分たちの街への認識を深めて、形あるものに



源浩さん  
(株源社長)

街づくりをしても、小東京じゃつまらない。何か、富山のにおいがプーンとするようなもの方がいい。

これみよがしのものを創るだけの街づくりではだめで、私達自身のハートで街を作っていくべきです。そのためには、もつと自分たちの街に対する認識を深めていくことが必要でしょうね。



坂場正保さん  
(富山県観光物産課長)

全国への売り込み方として、例えばネットワーク方式も考えられると思います。潮来や柳川などの水郷とタイアップして水郷ブームを盛り上げ、全国キャンペーンを展開する中に富山の松川も加わるという方法ですね。そして、水郷サミットを持ち回りで開催したりすると、富山県だけでPRするよりも、他の水郷の知名度を利用でき

きていいのかなと思います。



河口清隆さん  
(懐石松や 取締役社長)

富山には個性がないということ、観光客にしろビジネスの人にしろ、全然印象に残らない街ということが富山のデメリットといえると思うんです。

富山は日本一「水」が豊富ですし、名水百選の中に4つも入っているわけですから、松川なり城址公園の中でこの「水」を仕掛けて作るということが必要ではないでしょうか。市全体に仕掛けを作るには相当のお金がかかりますから、まずは1点に集中して作り、そこからイメージを広げていけばよいのではないかと思います。



玉木恵子さん  
(フリーアナウンサー)

「婦人の翼」でカナダのビクトリア島でホームステイした時、持っていた立山の写真を見せたら、「ワンダフル!」ととても感激されました。私たちは自然に恵まれすぎていてあまり気にも留めませんが、自然という宝は開発されるものとは別に、保存していかねばならないと思います。

市の中心部へ向かう道路の片側を薬問屋街、反対側を魚市場が並ぶと言ったような、その道を歩くだけで富山がわかるような街並みができる、富山らしさが感じられていいですね。道路脇に疎水が流れ、手で触れられるというのもいいですね。

「水」を治めるばかりの富山の歴史でしたが、もつと生活のそばにあつて触れたり、体で感じたりできる観光の方法を考えてもいいのではないでしょう。④

※富山県婦人会で行われた海外交流事業。

▼サンアントニオ・リバーウォークの開発設計者、ロバート・ハグマンは「開発が進めば進むほど、川の自然の特色が保たれ、その価値が高まる」ことを目指していた。

